

青木一男社長の話

この工場は青木一男社長が三年前に五日目の建て替へて完成させた生コン工場であり、その生コン人生の誇りだ。長い豊富な経験から狭い敷地に見合った万全のを作り上げた。見栄えのするレイアウトでコンバクトにまとめた同工場には見学者も多く、プロ目にも大きな示唆を与えているようだ。

栃木県鹿沼の出身のところから姉南を社名にした。昭和十七年生まれ。農家の長男だが「どうして都会に出たい」という熱意から十代で東京へ飛び出した。昭和二十年というるな職業に付いたが、指を折って思出としてくれた。それからダンロップトラック運輸、そして生コンと出会った。東京シクリート留米工業職を得て、主に材料の配達を担当した。昭和三十八年十九歳で独立した。始めは中の組み立て設備を買って東久留米市で生コンを始めた。当時のエピソードがある。チキントクの電報で駆けつけると睡んで、長男を家に呼び戻すための親戚一同の手こたえた。そこで両親は息子の強い独立の決意を知り、許しななやトラック購入の援助までしてくれたいと言った。これは夫夫人の柄が好かれたため一男氏は感謝している。それは三年間、昼は生コン夜はトラック運転手と休みなく働いたと懐かしそうに振り返った。夫人もダンロップの上げ下ろし方を教わらないままトラックを駆けて配送を手伝った。常に夫婦共同の仕事ぶりだった。

そして昭和四十年に埼玉県新座の地の所に生コン工場を建てた。事業の発展とともに周囲の田舎の景色はぼんやりとした野暮に変わっていた。生コン工場はその地に受け入れられる存在であるべきというのが信念だ。特に大量の出入りや渋滞は常に気に遣ってきた。今回スイング式の導入でだいぶ緩和されている。本社の上が住んでいる。目の前に盛えているものに驚かされてゐる。後継者が悩んでいる。長男康至氏はない。弟良平君は幼少時から働く父を見て、家業の手伝いにきた。そして自然のように生コン業界に入ったが、準備が整っていないので研鑽を積んでコンクリート主任技師など八種類の資格金を得ている。今年はお互に認定取得を目指して日本全国に向き合っている。農家の長男が家族経営を現任わが子を見たいからと、親の有難みがともじみ分かった時、二戦争も覚えてもう二十歳の時実家の屋根に上って竹さおBoboを打ち落とそうとして足をとっただけで庭をはりきれなかった。閉居と〇〇邸のバレーボールを持ち上げられた面々をそれた両人は感謝していた。